1963 年から 1965 年の東愛知新聞に掲載された図書館・読書に関する記事について

村　上　由美子

1．はじめに

私の勤務先である田原市図書館では、田原市に関する新聞記事の見出しを入力し、図書館のサイト内（「田原市新聞記事見出しデータベース」）で検索できるようにしている。収録しているのは愛知県東部のローカル紙である東愛知新聞と東日新聞、そして中日新聞、朝日新聞、日本農業新聞である。過去 2 年分ほどは記事をファイルに閉じて中央図書館の地域コーナーで閲覧できるようにしており、それ以前の記事は、保管してある原紙（東愛知・東日）もしくは有料データベース（中日・朝日）によって参照できる（日本農業はデータベース契約をしていない）。

【田原市中央図書館の新聞記事ファイルの棚】

上記の業務は、2002 年の田原町図書館開館 1 年前の 2001 年度以降継続して行っているが、2021 年度からマイクロフィルムで保管している古い新聞記事をスキャンしデジタルデータ化し、上記の業務と同じく旧渥美郡 3 町[(1)]に関する新聞記事の見出しを入力する

という作業に同僚たちと携わっていて、[2] 現在も継続中である。

作業を進めつつ、50 年以上前の新聞を現在から見ていると、いろんな面で様相が異なって新鮮で、時々「昔はこういうことが記事になったが今では考えられない」という出来事が載っていてとても興味深かった。図書館についても、現在とは何かと異なる状況であるし、当時の図書館に対する新聞（一地方紙ではあるが）記者の目線も感じられた。そこで、図書館や読書に関する記事について抽出してみることにした。

なお、引用した記事が、例えば 1963 年 2 月 1 日の 1 面に掲載していた場合は、（630201 ①）と表示する。また、当時の新聞は旧字体を使用している場合があるが、本稿中は全て新字体に直してある。数字の表記は、算用数字に統一した。

2．対象とする時期の東愛知新聞について

今回の調査対象は東愛知新聞の 1963 年 2 月 1 日から 1965 年 12 月 31 日までの約 3 年間の記事である。なぜ 2 月 1 日からかというと、東愛知新聞はこの日から 4 紙を統合し東愛知新聞と名乗っているからである。従って、マイクロフィルムも 1963 年 2 月 1 日が最初の日付である。

以下は、1964 年に写真植字機を導入した紹介記事からの引用である。

「東愛知新聞社は、昭和 31 年 11 月 3 日スタートした『夕刊とよはし』としてお目みえしていらい、豊橋毎日新聞と改題 昨年（1963 年　村上注）2 月には傍系紙『豊川市民新聞』『新城新聞』『蒲郡日日』の 4 紙が統合、ついで 6 月には『豊橋新聞』の全読者網を継承、さらに 10 月には岡崎毎日新聞社を統合併合して、ここに文字通り名古屋市以東、北遠、西遠にまたがる『東愛知新聞」として確乎たる地歩を築きあげました」（640425 ④）。

掲載範囲は「名古屋市以東、北遠、西遠にまたがる」としているが、東三河地区で一番大きい都市である豊橋市の記事が目立つ。

紙面はいわゆるブランケット判（全国紙などと同じ大きさ）で、ページ数は日によって違い、4、6、8 ページのいずれかである。

ちなみにマイクロフィルムの時点で抜けている日や抜けている面があった。

約 3 年分の紙面から、公共図書館、学校図書館、読書に関する記事を抜き出し分類した。4 節以降考察していく。

3．当時の東愛知新聞に登場する公共図書館について

1963 年といえばいわゆる『中小レポート』が発行された年であるが、三河地域において、公共図書館は豊橋市と岡崎市くらいにしかなく、あとは蒲郡市に公民館図書室と、田原町の役場内に通俗図書館があった。

4．公共図書館に関する記事について

公共図書館に関する記事は全部で 136 件であった。以下、多く見られた記事と印象的な内容の記事に触れていく。

4－1 各種告知

岡崎市立図書館と豊橋市立図書館[(3)]は長期休館や夏季の開館時間延長の告知記事が載ることがあったが、必ず載るというわけではない。例えば岡崎市立図書館の年末年始の休館は、調査対象期間においては 1 件しか掲載がなかった（651220 ②）。

両図書館の新着図書の紹介記事がいくつか（豊橋：4 件、岡崎：1 件）掲載されていた。私はこのような新聞記事を見たのは初めてだったので驚いたが、他の自治体で働いている図書館員の知り合いから、かつて勤めていた所では現在（聞いたのは 2021 年）も地元の新聞に紹介記事を載せていると教えてもらった。サイトに新着図書を載せている図書館は数多くあるので、今も昔もニーズがある情報だろう。フォーマットは固定されておらず、書名と著者名だけの時もあれば（631012 ②）、NDC 別に書名だけが並んでいる記事（641105 ④）もある。

当時の愛知図書館からの移動図書館の日程が載っている記事は 4 件あっ

た。全て 63 年で、内容はいずれも日時とルートである。64、65 年は記事が見つからなかったが、それ以降同様の記事が掲載されているのは確認済なので、移動図書館が来ていなかったわけではないだろう。行き先は新城（2 件掲載）が 2 日間、南設が 4 日間、豊川が 3 日間である。かつては愛知県の移動図書館が複数日にわたって運行されていたことを私は初めて知った。新城への巡回の記事中に「農繁期に入っての図書巡回であるが、有意義な図書が多く準備されており」とあり、利用者の多くが農業従事者であったと推測できる（630526 ②）。

豊橋市立図書館は移動図書館（自動車文庫と呼ばれている。名称は「きぼう号」）のサービスを 1960 年から実施しており[(4)]、調査範囲では 4 件の記事があった。1964 年の記事 3 件は同じ事業を指している。すなわち、グループ向けにセット貸出をするという内容である。10 主題 62 セットが設定されている。「愛と結婚・幸福について」「明るい家庭をつくる」など、主婦向けのテーマが多い（640305 ①、640413 ③、640516 ③）。

65 年の記事の見出しは「勤労学級など重点　豊橋市立図書館　市民の文化向上へ」とあり、自動車文庫と貸出文庫（BM の介在しないセット貸出と思われる）の利用の多い主婦層以外に、勤労学校や会社や工場の読書グループをターゲットにするというものである。記事によると「青年団層の文庫利用」が年々減少しているので、歯止めをかけたいという意図もあるとのことだ（650413 ②）。

豊橋市立図書館では他に、「緑蔭こども図書館」の告知もあった。夏休み期間に「きぼう号」で、図書館から遠い地域の小学校を巡回するもので、63、64 年は 7 月に、65 年は 8 月に告知記事が載っていた。実施の条件の 1 つとして「子どもの読書について母親との座談会を開く」（640803 ③）とあり、啓蒙的である。

現在は、公共図書館に関する記事というと展示に関する記事が多いように思うが、今回の調査では読書会、読書感想文募集、レコード鑑賞会の告知を多く見かけた。ほとんど豊橋市立図書館に関する記事である。展示の

記事ももちろんある（例えば「近く古稀本の展示会　豊橋市立図書館　七万円の高値呼ぶ　圧巻『花祭り』研究書」（640205 ③））。

４－２　利用者の読書傾向

田原町の通俗図書館の利用状況については 4 件あった（631030 ②、640128 ②、640919 ③、もう 1 件は後述）。図書館がまとめたものを元に記事にしているようだ。蔵書冊数や利用者数、男女比（毎回おおよそ 6:4）などを挙げている。どの記事も利用者が増加していることを記している。よく読まれるジャンルとしては推理小説や大衆小説など。「全般にて婦人の読者層が年々増え、年齢層も若い人たちに移り 25 才以上が約 70 パーセントを占めている（650311 ②）」という記述は現在の状況とはかなり異なる。

豊橋市立図書館は 63 年だけ前年度の利用状況についての記事がある。豊橋は田原と違い、女性の利用者の方が年間にして 1 万人ほど多い。人気のジャンルは「文学、社会科学、歴史、自然科学の順に読まれている」だそうだ。「読書の生活化というネライが少しずつ浸透しつつある」と当事者（原文ママ。図書館員を指すか？）の声で締めている（630531 ③）。もう一つ、新聞社の文化部主任と牧忍教館長による、児童・生徒の読書傾向について対談している記事がある（640606 ⑤）。貸出は文学が 7 割で、館内では字典が一番多く利用されているそうだ。

４－３図書館員が登場する記事

レアケースではあるが、図書館員が登場する記事がいくつかあった。まず、人を紹介するコーナー「小型マイク」に豊橋市立図書館相談係の山口玄が登場している（651213 ②）。記事によると山口は短歌誌や文芸誌の同人でもあり、東愛知新聞の連載のタイトルレイアウトも手がけている。映画「天国と地獄」を語る座談会にも参加している（630323 ③、630324 ③）。

「図書館の自由に関する宣言」がつくられるきっかけとなる文章を『図書館雑誌』に投稿した中村光雄[5]が、「郷土文化の旗手」という見出しの記事（640218 ③）と、記者とのちょっとした会話のコーナーである「立ちばなし」（651030 ⑦）に載っており、加えて新刊紹介コーナーでも署名記事を書いている（「『赤ひげ診療譚』を読んで」631107 ④）。4－2で紹介した記事のように、館長が登場するのはわからないでもないが、そうではない人たちも載るのはユニークである。もう一つ、「裏方さん」というコーナーで児童分室の田中あや子が登場している（19631219 ②）。このような紹介記事なら意外性は感じない。

「時鐘」という、1 面に載る寄稿文のコーナーがあるのだが、そこに寄稿された 1963 年当時の豊橋市立図書館長である長谷川博彦の文章を紹介したい。タイトルは「みんなの図書館」（630531 ①）。長谷川は「きぼう号」の行った先で本を借りていく母親たちの姿に、家庭での読書の波及を期待している。本を家庭へ持ち込むことにより「“自分のためにすわる時間”を生み出しているのであればこれは生活の大きな変革であるというべきである」という文に私は感銘を受けた。母親たちは「自分のためにすわる時間」が少ない、という認識を図書館員が持ち、その時間を増やそうと意欲を持っていたことに。

また、「例えば、豊橋駅前あたりの“ビル”の一室に「貸出専門の図書館」でも設けたら、なんてことが図書館職員のなかで話し合われている。そこには小説・教養書の新刊書が揃えられ、喫茶店でものぞく気軽さで、閲覧票とか何とか一切不要、貸出票のみで手軽に本が借りられるというのであれば、おそらく図書館奉仕の新方式として全国の図書館界に話題を提供することだけは確かである」という箇所は、まるで 2021 年に開館した豊橋市の「まちなか図書館」の予見ではないか。当時の図書館員が利用者のことを考え熱い議論をしていたことが伺える。

4－4 その他

印象に残る記事を 2 つ紹介する。1 つは「避雷針」という、取材の過程で見聞きした内容を綴った短文が 3 つほど並ぶコーナーに書かれた、レファレンスについての記事である。実際は「レファレンス」という言葉は使われておらず「豊橋市立図書館には質問処理係というものがあり、各方面にわたる質疑事項を親切に回答していることがわかった」とあり、「これは図書館の権威と信用を裏付けるもので、1 月には 16 件も質問事項が舞いこんでいる」と続く（640220 ②）。当時の新聞記者がレファレンス業務に興味を持った様が伺える。

もう 1 つ、公共図書館以外にも関係していることであるが、地元での開催でも何でもない日本図書館協会主催の図書館大会の記事があって本当に意外だった。載っていたのは 1964 年 9 月 1 日から 3 日にかけて行われる青森での大会についてで 2 件あり、1 件は告知的な内容である。ただし「教育愛知の面目をかけての活動を期待したい」という文で締めくくられており、内容を正確に把握して書いているか少々疑わしい（640806 ④）。あとの 1 件はもう少し大きい記事で、メインは公共図書館の現状についてである。「本、分館合わせ 810 館　わが国の図書館の現状」（640813 ④）という見出しで、日本図書館協会の調査に基づき、全国の図書館数、蔵書数、利用者、貸出した人数、BM の数などを載せている。「当地方の図書館関係の各位の、いっそうの精進と発展を望みたい。」と締めくくられている。

5．学校図書館・学校に関する記事について

5－1 校舎・教室の増改築について

学校図書館及び学校（については読書や書籍などに関連した記事）に関する記事は 81 件あった。現在の東愛知新聞で学校図書館に関する記事を目にした覚えはほとんどないので、この頃は今と比べ、とても多くの記事が載っていたと言える。まず目につくのは、校内に学校図書館を含めた校

舎をこれから新築もしくは改築する、またはそれらが実施されるよう陳情をするという記事である。3 年の間に、藤ノ花女子高校の校舎増築着工の記事（640725 ③）や「新校舎が完成　豊川高校」（641223 ②）という記事が、本郷高校（北設楽郡東栄町にあった高校。現在は閉校）（630824 ②）、渥美農業高校（631205 ②）、豊橋市立五並中（650916 ②）、豊橋市立青陵中（651005 ②）は陳情するという記事が載っていた。豊橋市立磯部小の陳情の記事（640919 ①）には、クラスが増えるので図書室を含めた特別教室を普通教室にしていると書かれてあった。

第 1 次ベビーブームに生まれた人たちが高校に入学するのがちょうどこの頃なので、豊橋市内高等学校が「各校で校舎増築」（640121 ②）という記事もあった。

５－２研究会・研修会の記事

次に目に付くのは学校図書館コンクールについての記事である。「20 日に図書館コンクール委員会 東三事務所」（630913 ③）、「図書館コンクール新城地区代表」（631004 ②）、「田原中など四校 図書館コンクール東三地区代表」（631003 ⑤）などの合計 7 件の記事があった。賞がもらえるような催しがニュースとなりやすいのは理解できるが、一方で集会や会議などの記事もいくつか見られた。例えば、「読書研究発表会 松葉小学校で」（631017 ⑤）という記事がある。おそらく教員達のクローズドな集まりであろう。そういったものを新聞記事にする意義があるとされていたから記事になっているのだろうが、どうして意義があるとされたのか。

実は、図書館関係以外でも、青年会婦人会の研修会や保母達の集まる保育問題研究会の開催など、集会の開催記事はかなり見かけた。数行の分量であることが多いので埋め草的に載せられていたのかもしれないが、最近の新聞ではあまり見かけない気がする。

５－３学校図書館の展示記事

学校図書館の展示記事は３件見つかった。全て高校である。現在の新聞で高校の学校図書館での展示の記事、というのはなかなかないように思う。

１つは「世界各国の国情集め 豊橋商高が 63 カ国から」（631213 ②）という記事である。これは豊橋商業高校の取り組みで、「63 カ国の大使館に連絡を取り、各国の地図、絵葉書、観光案内、最近の国情を説明したパンフレットなどを集めている」とのことで「社会科や商業、貿易科などの研究資料となっているとのこと」だそうである。「新しい図書館経営の一つの試みとして関係方面から、注目されている」という文で終えられている。面白い取り組みだと思うが、私の勤務館の田原市図書館でも同様にパンフレットを集めている[(6)]し、他の図書館でも見かけたことがある。学校図書館での取り組みはあまり聞いたことがないが、記事中に書いてあるように学習に役立つだろう。

もう２つは豊橋東高校で、両方とも「早耳広耳」という小ネタ的な記事のコーナーに載っていた。まず「“ 複製図書参考展 ” と “ ある先生によって選ばれた本 ” 展」（641009 ②）である。複製図書は、「後奈良院宸筆」などが挙げられているので、古文書の複製であろう。それと「図書館階上で、豊橋を中心とした芭蕉、耿陽、牧水などの句歌碑の写真と拓本展を開いている」（651112 ②）という記事で、教員が作成したものらしいが少々趣味が高じての展示、というようにも思える。いずれにせよ新聞記者が学校図書館に取材に行っているということが、今では考えられない。

５－４豊橋東高校学校図書館に関する記事

学校図書館に関する記事でも、とりわけ多かったのが豊橋東高校の学校図書館や読書に関する記事である。全部で 16 件である。前節の 64 年の展示記事以後、文部省発行の『高等学校における学校図書館運営の手びき』のグラビアに掲載された（「早耳広耳」641221 ②）という記事や、生徒

への読書調査（650402 ⑤、651229 ②）、豊橋東高校が編集した『図書館利用の手引き』がひくてあまたという記事（「早耳広耳」650928 ②）が掲載されており、記者側は先進的な学校図書館だと認識していたと思われる。更に、学校図書館や読書について、教職員が登場する記事や署名記事は先に挙げた東高校の記事 16 件のうち、11 件を占める。教員で「図書館長（という肩書きがついているが校長ではない）」の大林淳男と「事務官」のちに「図書館主任」という肩書きの近藤要はそれぞれ計 4 回登場している。大林は学校図書館について 2 度の「立ちばなし」で「今後の図書館は教科外活動というより、学習に直結した資料センターであるべき」（650711 ⑦）「教師及び生徒の個別のレコード鑑賞、ラジオ放送や録音教材の聴取などのできる完備したオーディオルームもつくりたい」（650918 ⑦）と語っている。近藤の人物紹介をしている「小型マイク」では、豊橋東高校の図書館についても「図書数は 2 万冊を超え、新聞 6 種、雑誌 37 種が備えられ、図書以外にも視聴覚資料としてレコード千余枚、フィルム 80 余巻」（651011 ②）と紹介しており、60 年近く前の高校の学校図書館としては充実していると思われる。他に、高校生の読むべき本を紹介する記事（651030 ⑤）や、読書調査についてのコメント（651130 ⑦）などがあった。

これらの記事を読んで、図書館運営にしっかりと携わる人間がいるからこそ取材をされ、世間に活動を知らしめることができるのだと感じた。

6．悪書追放運動について

この時期の愛知県東部では悪書（もしくは不良図書）追放運動が盛んだったようで、それに関する記事も多く掲載されており、17 件あった。豊橋青年会議所による「不良図書の流通機構と、その社会的影響および対策について」という例会の講師に豊橋警察署の防犯課長と豊橋市立図書館の館長が呼ばれている（631118 ②）。この記事によると「さいきんの青少年

不良化は不良図書にも原因があるとみて」おり、青年会議所以外には、「豊橋青少年愛護母性同盟松葉地区」という団体が校区の家々を巡回して「不良図書」を回収し、「これを売りその費用でよい本を購入して同校（松葉小学校　カッコ内は村上）図書室に贈る。」（641113 ③）という活動をしている。他にも、警察署が書店に協力を求める（640119 ③、641105 ⑦）、豊橋青年会議所による良書の図書館への寄贈（640116 ⑤）、「不良図書追放ダルマ」と名付けられた、ダルマに模したポストを駅などに備え付けたという記事（641210 ⑦、641213 ⑦）、「嘆きの不良図書追放ダルマ　豊橋駅などの構内　2 ヶ月に僅か 4 冊　酔いどれのイタズラ」（650630 ③）などがある。

7．読書について

新刊紹介コーナーは「本だな」というタイトル名で、64 年 1 月 23 日の 4 面に初めて登場する。以後、おおよそ 1 週間に 1 回、1 ～ 3 冊紹介されている。ベストセラーも 64 年 11 月 3 日以降、2、3 週間に 1 回ほど掲載されている。調査した 3 年間のうち、滑川道夫の署名記事が何回か載っていた。次節で取り上げる。他に村岡花子や今江祥智、羽仁説子が読書や本について書いている署名記事もあった。

7－1 滑川道夫の署名記事について

滑川道夫は「綴方教育や読書指導の実践的研究」を進めた児童文化研究者である。[7] おそらく共同通信からの配信だと思われる署名記事が全部で 6 件掲載されていた。当時の肩書きは「日本読書指導研究会会長」か「教育評論家」である。

「知的な興味起こす　ノンフィクションを中心に」という見出しの記事（640730 ⑤）は、夏休みに向けての本紹介である。「現代的な新作を期待　マンネリ化した童謡絵本」（650211 ⑤）では童謡を載せた絵本の中

で、著作料コストをなるべく払わないために古い童謡を載せる本、楽譜を載せない本が多いことを批判している。フォノシート（ソノシート）を付けるべきだとも主張している。「大まかな絵柄の物がよい　幼児の絵本」（650305 ⑤）では、製本が丈夫で大まかな絵柄の、生活に身近で見なれたものを正しく描いた絵本を勧めている。「子供のための名作全集　外国もの偏重の傾向　欲しい現代文学の認識」（650514 ⑤）では翻訳する際にダイジェスト版にしていないもの、子どもの読書力にあったものを選ぶべきということと、子どもに良書を与えるだけで放っておいてはいけないとも述べている。子どもの読書力にあったものを選ぶべきという考えは次の「もっと出ていい学年別の本」（650901 ④）にも反映されている。滑川はマンガについても「少女週刊誌を切る」（651119 ②）という記事で言及している。女の子が悲哀好きだと少女週刊誌の編集側が高を括っているとし、現実に即したストーリー作りをするべきだと批判している。記事に書かれている主張は現在でも通用する。

７－２親子読書運動について

1960 年に当時の鹿児島県立図書館長であった椋鳩十の提唱により始まった「母と子の 20 分間読書」に関する記事は 7 件あった。「モデル地区を指定 豊橋 子と共に本を読む運動」（630716 ②）、「賀茂地区で実施へ 豊橋　『子と共に本を読むお母さん運動』」（640808 ②）は、モデル地区が決まったという記事である。「子とともに本を読む　お母さん運動　対談で NHK 豊橋で吹込み」（641028 ③）はモデル地区のお母さんや豊橋市立図書館長が対談番組の録音をしたという内容の記事である。「子と本読む運動の実態調査まとまる　豊橋加茂校区婦人会」（650514 ②）「“読書欲が高まった”子とともに本を読むお母さん運動の実態調査」（650522 ②）は、前者は婦人会、後者は図書館の調査結果である。あとの 2 件は「PTA リレー随筆」というコーナーの文で、「やってみてほんとによかった！子供との 20 分読書」（650709 ⑤）、「ある日の 20 分読書」（650901 ④）

というタイトルの署名記事である。両方とも男性が書き手であった。運動名の表記が揺れているが、理由はわからない。

8．おわりに

1963 年から 65 年という、公共図書館がこれからどんどん新設されようとする時期の、一つの地方紙の図書館・読書に関連する記事を概観してみた。言い換えれば、当時の新聞記者が図書館や読書に対してどんなことにニュースバリューを感じたのかという一端に触れただけではある。一端ではあるが、出来事も価値観も、現在とは様相が異なることを具体的に示すことができたと思う。東愛知新聞として新しい出発を始めたばかりなので、全体的に試行錯誤をしているように感じるところもあり、今回取り上げた範囲だけでも紙面からは今の新聞では感じられない表現や企画も見受けられた。現在の紙面より、取材対象との距離が近いのが却って新鮮だった。また、改めて新聞というメディアの持つ情報の量と豊富さ、記録力なども感じた。

60 年近く前に行われていた、図書館に関する様々な取り組みを知れたことは有意義であった。自分が働く地域の図書館の歴史を感じとれた点は今後の業務に生かしていきたい。

注

（1）2003 年に田原町が赤羽根町を編入合併して田原市になり、田原町図書館は田原市中央図書館に改称される。田原市は更に 2005 年に渥美町を編入合併する。田原市の沿革（田原市サイト）http://www.city.tahara.aichi.jp/seisaku/profile/1001447.html（参照 2023.1.21）

（2）詳細は「地方新聞のデジタル化及び見出しデータのオープンデータ化事業」『図書館の学校』2022。秋、図書館振興財団、p.21 を参照。

（3）現在の名称は豊橋市図書館。『図書館要覧　令和 3 年度』（2021.9. 豊橋市図書館）掲載の豊橋市図書館条例の日付が「昭和 57 年 12 月 22 日」で，条文の前に「市立図書館条例（昭和 26 年豊橋市条例 9 号）の全部を改正する.」と書かれており、この時名称を変更したと思われる。

（4）豊橋市図書館 100 周年記念誌編集委員会編『豊橋市図書館 100 年のあゆみ』豊橋市図書館、2014.1、p.98
（5）豊橋市立図書館の職員間で起きた閲覧証をめぐる議論（豊橋市立図書館サイト）https://www.library.toyohashi.aichi.jp/facility/chuou/information/tosyokansensou3.pdf（参照 2022-12-30）
（6）詳細は杉浦未央、廣瀬千草「田原市図書館の観光パンフレットの収集について」図書館問題研究会 編『みんなの図書館』（536）、2021.12、教育史料出版会、p.27-31 を参照。
（7）黒沢浩他編『新・こどもの本と読書の事典』ポプラ社、2004.4、p.348